

# Newsletter No. 8

## Maxillofacial Prosthetics

発行人 後藤昌昭

編集 広報委員会

事務局 〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11 一ツ橋印刷(株) 学会事務センター内

Tel : 03-5620-1953 Fax : 03-5620-1960

E-mail : max-service@onebridge.co.jp

### 第 26 回学術大会案内

日時：2009 年 6 月 26 日（金）、27 日（土）

場所：三重北勢地域地場産業振興センター

“じばさん三重”（三重県四日市市）

### 第 26 回学術大会のご案内

第 26 回日本顎顔面補綴学会総会

総会長 下郷 和雄

愛知学院大学歯学部

顎顔面外科学講座



顎顔面欠損の再建・補綴を研究研鑽の対象とする日本顎顔面補綴学会の

第 26 回総会を四日市の地で開催させていただくことになり、大変光栄なことと存じております。会期は平成 21 年 6 月 26 日（金）・27 日（土）で三重北勢地域地場産業振興センター“じばさん三重”にて開催いたします。特別講演は三重大学医学部名誉教授の坂倉康夫先生にお願いし、「鼻・副鼻腔の構造、機能と病態」というテーマでご講演いただくことになりました。上顎切除後など手術による解剖形態の変化に伴う機能や病態につい

て解説していただく予定であります。顎補綴の目的や今後の展望についての知見が得られると期待しています。

一般口演や会員懇親会も例年通りで、活発な討論の場となり参加者間でそれを共有することで今後の歯科医療にとっての一層の貢献への道につながらとと考えています。懇親会では、三重県には松坂牛をはじめ沢山の名産品がありますので、ぜひご参加いただきましてこの機会に初夏の三重をご覧くださいくのも一興かと存じます。どうぞ皆様のおいでお待ちいたしております。

JR 名古屋駅から会場までは近鉄をご利用いただくと便利です。近鉄名古屋駅の発車時刻表は <http://www.kintetsu.co.jp/railway/Dia/pdf/080317/1704801.pdf> をご参考ください。近鉄四日市駅からは、北改札からアピタ或いは都ホテルに向かってアーケードを進んでいただき、信号を渡った先のアピタの中から直接会場に入ることができます。また、会場は市立博物館や市民公園に隣接しておりますので、天気がよければ休憩することもできます。

## 第 25 学術大会報告

平成 20 年 6 月 13 日（金）、14 日（土）、九州歯科大学講堂において鱒見進一総会長（九州歯科大学顎口腔欠損再構築学）のもと、第 25 回日本顎顔面補綴学会総会および学術大会が開催されました。学術大会前日の 12 日午後に理事会および各委員会が行われ、13 日には高橋先生の特別講演と一般講演 17 題の発表が行われました。さらに 15 日午前中には学術委員会（冲本学術委員長）主催の第 13 回教育研修会、午後からは一般講演 9 題の発表が行われ、盛会のうちに幕を閉じました。

### 特別講演

#### 顎顔面領域の再建のための顎骨延長法の応用

高橋 哲先生

九州歯科大学口腔顎顔面外科学講座  
形態機能再建学分野

学術大会 1 日目の午後から標記のタイトルにて高橋哲先生の特別講演が行われた。講演では顎骨延長法のメカニズム、顎骨延長法の上下顎骨再建への応用、顎骨延長法と従来法の比較などについて、臨床例や文献からの引用を交え、下記の概要でお話された。

1950 年にロシアの Ilizarov によって確立された仮骨延長法であるが 1970 年代には整形外科領域で盛んに応用され、顎顔面領域への導入は 1990 年代以降である。整形領域で対象となる四肢の長管骨と異なり、彎曲する顎骨では応用が難しく、また舌圧や咀嚼筋圧の影響もあり延長方向の制御がうまくいかず失敗する症例も見受けられる。しかしながら顎骨延長法は骨移植のためのドナーや細胞培養など必要とせず、骨膜がうけるメカニカルストレスをうまく利用した本方法は生体内で行われる再生治療ともいえる。骨量の増加のみならず軟組織、特に角化歯肉の獲得といった GBR だけではなしえない成果を得ることができ

る。また形成された骨にはインプラント植立が可能で、補綴治療をはじめ機能回復に大きく寄与することが可能である。ただし、先にも述べたように術者の技術に負うところも多いこと、治療時間は血管付骨再建では 3～6 ヶ月で補綴が可能となるが、同方法では仮骨延長終了後延長器を除去して骨の治癒を待たねばならず、7～20 ヶ月程度の時間がかかること、合併症として、感染・延長不良・方向のずれ・骨折・延長器破折・ディフェクトが残り再再建の必要性などがあげられ、配慮が必要である。

今後の新しい展開として、骨膜細胞にメカニカルストレスをあたえ、骨膜を切らずにのばす骨膜伸展骨形成 periosteal expansion (Distractive) osteogenesis の情報や、移植骨はいずれ吸収することから、移植した骨を延長させる方法について、また骨の代わりに  $\beta$ -TCP ブロックなどを使用できる可能性についての最先端の研究紹介をされた。

再生医療が脚光を浴びている昨今、顎顔面領域での再建と補綴治療において大きな効果を持つ治療法の一つであるという印象を強く与える講演で、会場からも大きな拍手が送られていた。

（冲本広報委員）



鱒見大会長より感謝状の贈呈を受けられる高橋先生

## 第 13 回教育研修会

日本顎顔面補綴学会第 13 回教育研修会は平成 20 年 6 月 14 日午前 9 時 30 分より開催された。今回の研修会のテーマは「顎顔面補綴治療の変遷 上顎腫瘍」であり、座長に大阪大学大学院歯学研究科高次脳口腔機能学講座の舘村 卓先生、講師には福岡歯科大学咬合修復学講座口腔インプラント学分野の松浦正朗先生、日本大学歯学部補綴学教室局部床義歯学講座の石上友彦先生、佐賀大学歯科口腔外科学講座の山口能正先生を迎えて行われた。

まず、研修会の開始に先立って舘村座長より本研修会の企画の要旨について説明があった。すなわち、過去 10 年間の各領域における治療の変遷や相互関係を振り返り、現状の解決すべき問題や他領域への期待を通じて、今後の課題について検討するというものである。



座長をつとめられた舘村先生

### I. 顎補綴治療のための手術での考慮

松浦正朗先生

福岡歯科大学咬合修復学講座  
口腔インプラント学分野

口腔外科分野の立場からの上顎腫瘍治療に関するご講演であった。1980 年代以降、画像診断では CT, MRI が登場し、放射線治療ではコバルト線源など病巣の局所に照射することが可能となるといった技術の進歩により、治療成績は向上し癌から生還する患者が増加した。そのため術後の社

会復帰が課題となり、治療計画として最後に顎補綴を行うことが必須となり、顎補綴治療は口腔腫瘍治療のステップの一つと考える必要があると指摘された。そのために治療成績を下げないで後遺障害を軽減し、顎補綴が行いやすい切除術をする必要があり、その工夫について提示していただいた。具体的には欠損腔の単純化、開口障害の発生を抑えるための頬側内面への植皮、筋突起の切除、顎義歯の維持源となる天然歯の保存などである。また、病態評価を体系的に行うために HS 分類を考案された。現在本学会員なら皆知っている HS 分類であるが、単なる欠損分類ではなく戦略的に機能回復を行う上で考慮されるべき要素である（H；支持域として用いることができる、S；顎義歯のみでの機能回復は困難、D；顎義歯の大きさ・設計に関係、T；維持源として利用できる）ことを説明された。

さらに、インプラントを応用した顎顔面補綴について症例が供覧された。インプラント補綴を用いた顎欠損に対する修復例を示した上で、インプラントを応用できる再建法の導入・開発、インプラント治療を可能にするための骨組織を含んだ再建法などの開発が求められているとのご指摘であった。

### II. 上顎腫瘍摘出後の補綴治療

石上友彦先生

日本大学歯学部補綴学教室  
局部床義歯学講座

石上先生からは補綴専門医として口腔外科医への要望、残存歯保護や顎義歯の維持安定を求めるための工夫といった観点からのご講演をいただいた。以前は生命の予後に主観をおいた口腔外科における口腔腫瘍摘出術と、切除術後の機能回復・生活の質を考える補綴の立場との違いに苦労されたこともあったそうであるが、現在では術前から補綴科が診察を行い、術後の補綴装置の維持・再建を見据えた治療計画を立てていくことが多いとのことであった。

顎義歯の製作の点では、まず印象時の材料や術



講師をつとめられた松浦先生、石上先生、山口先生  
(左より)

式に関する課題を提示していただき、新たな顎義歯用印象材の開発についての提案があった。さらに、顎義歯の設計について栓塞子の設計や残存歯に負担をかけない工夫、ティッシュコンディショナーの使用によるカンジダ症の問題、維持困難症例における設計の工夫など、誰もが日常の臨床で頭を悩ませる問題についてアドバイスを頂いた。さらに、インプラントを応用した顎顔面補綴治療の可能性と問題点について考察された。口腔外科医だけではなく歯科衛生士や歯科技工士、さらに言語聴覚士といった多くの職種との連携の可能性・必要性についてご説明いただいた。

### Ⅲ. 当科における上顎顎補綴の変遷

#### —歯科技工の立場から—

山口能正先生

佐賀大学歯科口腔外科学講座

実際に顎義歯を製作する歯科技工士としての立場からのご講演であった。まず上顎顎補綴治療の目標(①発音機能の回復 ②咀嚼・嚥下機能の回復 ③審美性の回復)について示された。また、腫瘍切除術早期の顎義歯製作および陳旧例における顎義歯製作のポイントおよび工夫についてご説明いただいた。さらに、エピテックシステムやナビゲーションシステムなどを用いたエピテーゼ治療についても説明があり、多彩な歯科技工症例を提示された。

歯科医師は十分な情報を持っていたとしても、顎義歯を製作する歯科技工士側は情報を伝えられ

ない限り模型以外からは患者の情報を得ることができない。山口先生はチーム医療の一員として初診時から治療に参加していることが何よりの強みであり、歯科医師から歯科技工士への十分な情報伝達や歯科技工士がチェアサイドへ参加することの重要性を今一度再認識させられた。

3名の講師のご講演の後、さらに顎顔面補綴に関する教育、障害者認定の問題、さらに機能評価の現状といった活発な討議が行われた。これらの講演から、顎顔面領域の腫瘍治療において、その治療に携わる口腔外科、補綴科、技工士などの各分野の専門家が、術前から診察に関わるなど分野間の十分な情報共有が必要なことはもちろんのこと、その後のリハビリテーションのことを考えて、さらに歯科衛生士や言語聴覚士との連携も重要であることを再認識させられた。また、こういった連携は実際の臨床の場だけではなく教育や社会的な面からも考慮されるべきであると考えさせられた。

(堀広報幹事)

### 関連学会報告

#### 8<sup>th</sup> Meeting of the International Society of Maxillofacial Rehabilitation

第8回国際顎顔面リハビリテーション学会がDr. David J. Reisberg (ISMR President) のもと、平成20年9月25日(木)から27日(土)







までバンコクのチャオプラヤ川の川沿いという立地の Royal Orchid Sheraton Hotel にて盛大に開催されました。

口頭発表は keynote presentation を含めて、38 題でした。口頭発表は大きく 4 種のセッションに分かれており、“Team Approach”, “Acquired Maxillary and Mandibular Defects”, “Cleft Lip and Palate/Dental Oncology”, “Evidence-Base Research/Tissue Engineering” と題した各セッションでは、活発な質疑応答が行われていました。その中で、25 日には、“Team Approach” のセッションで顎顔面補綴学会理事長後藤先生による招待講演が “Use of the Dental Implants for Maxillofacial Rehabilitation” として行われ、興味を持った各国の参加者から多くの質問が寄せられ、大変盛況でした。

ポスター発表は初日の 24 日に行われ、本邦からも演題は多くありましたが、開催国タイからの発表演題は相当な数にのぼり、結果 153 題という今までにない数の演題数に従い、賑やかなポスター発表となりました。

今回の大会は、顎顔面補綴学会が団体会員として ISMR に加盟して初めての大会になったこと、そして日本から近い、タイでの開催ということもあるのでしょうか、日本からの参加人数も多いものでした。

日本からの発表演題を口頭、ポスターを含めまして施設ごとに列挙いたしますと、愛知学院大学（ポスター 4 題）、岩手医科大学（ポスター 2 題）、大阪大学（ポスター 2 題）、神奈川歯科大学（ポス

ター 1 題）、鶴見大学（ポスター 4 題）、東京医科歯科大学（口頭 2 題、ポスター 4 題）、東京大学（ポスター 1 題）、東北大学（ポスター 1 題）、徳島大学（ポスター 1 題）、日本大学（ポスター 2 題）、日本大学松戸歯学部（ポスター 1 題）と、多くの発表がありました。

大会全体を通して、今まで以上にインプラントに関する研究や症例報告が多く見られ、その治療効果が報告されていました。また QOL に関しては、患者本人のみならず、その家族に焦点をあて動画を交えた発表もありました。

次大会はイタリアのジェノバで開催予定です。

（隅田広報委員）

## 第 10 回日本口腔顎顔面技工研究会

第 10 回日本口腔顎顔面技工研究会が、平成 20 年 9 月 27 日（土）に市立伊丹病院歯科・口腔外科技工室吉川昌平先生を大会長として伊丹市商工プラザで開催された。

今回は、「伝統技術の継承者たち～その現在と将来性への展望」という大会テーマで、会長講演後、一般口演 12 題、特別講演 2 題、宿題講演 1 題、会員企画 2 題、計 18 題で、参加者は 216 名で非常に盛会であった。

会長講演では、「口腔顎顔面技工研究会 10 年の足跡」というテーマで、この会の歴史を語られた。

一般口演は、この会の会員に口腔外科の技工士が多いため、エピテーゼ、顎義歯、人工舌、顎



変形，SAS をテーマにした顎顔面補綴に関する演題が多かった。また咬合面形状による咀嚼効率の研究や，地元の衛生士会からの活動報告などもあった。

特別講演Ⅰでは，「歯科技工をとりまく多様なテクノロジーと素材を生かす」というテーマで，大阪大学の前田芳信教授がサーモフォーミングを応用した技工やジルコニア，CAD/CAM，ガルバノについて話された。

特別講演Ⅱでは，「伊丹と酒造り」というテーマで，小西酒造の村田茂治先生により，伊丹が清酒発祥の地であり，酒どころとしても有名なため，清酒作り 400 年の歴史について語られた。

宿題講演では，「歯科技工士と科学研究費」というテーマで山形大学の里見孝先生が，科研費申請について話された。

会員企画Ⅰでは，「究極のパラメディカルメイクアップ」というテーマで，日本パラメディカル協会の牧野エミ先生が，リハビリメイクやハリウッドでのラテックスやシリコンを使った特殊メイクについて話された。また特殊メイクの技法を使って，エアブラシによるエピテーゼの色調補正の話などをされた。

会員企画Ⅱでは，「初めてのエピテーゼ・診断から設計まで」というテーマで，愛知医科大学の森下裕司先生が，植皮手術ができないような患者さんに対してのエピテーゼの必要性を訴えられ，また製作する技工士が患者さんと対面したときの気構えについて話された。

大会テーマに「伝統技術の継承者たち～その現在と将来性への展望」とあるように，顎顔面技工に携る技工士が，このような会を通して後輩たちに伝承することで更なる顎顔面技工の進歩があると考える。

次回は宮城県仙台市で仙台赤十字病院歯科口腔外科の渡辺健先生を大会長として開催される予定である。

(山口広報委員)

## 第 14 回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会

去る 9 月 13 日・14 日の 2 日間にわたって，慶應義塾大学医学部教授の里宇明元大会長のもと，幕張メッセで上記学会が開催された。参加者は摂食・嚥下リハ関連の専門職を中心に 4,000 名を越え盛況であった。学術大会のテーマは，「食えること：サイエンスと食文化の融合に向けて」とされ，会長講演をはじめとして，招聘講演 2，教育講演 3，シンポジウム 6，交流集会 4，さらに市民公開講座，ポストコンgressセミナーなど，昨今の嚥下リハの社会的認知，関心の高さを反映して内容も多彩なものであった。本会の会員数は既に 6,000 名を越えているが，会員構成を見ると ST が 37% ともっとも多く，次いで歯科医師 15%，看護師 12%，医師 11% の順である。歯科医師の割合もとても高い。口演・ポスターを含め 400 を越える演題が発表されたが，その中で補綴治療関連の演題を拾ってみると 6 演題であった。従来，口腔がん術後の PAP 関連演題が多かったが，脳血管疾患・神経筋疾患・頭部外傷患者の嚥下機能の回復に PAP を適用する試みの報告も増えてきている。今後，本学会での補綴領域関連演題数の増加が期待されるところである。

来年の第 16 回大会は名古屋国際会議場において，8 月 28 日・29 日の 2 日間，藤田保健衛生大学の馬場 尊教授により開催される予定である。

(熊倉広報委員)

## 書籍紹介

### 顎顔面補綴をする上で参考となる言語聴覚領域の参考書

熊倉勇美

川崎医療福祉大学

- 1) 小寺富子監修「言語聴覚療法臨床マニュアル：改訂第 2 版」共同医書出版社，2004

STのための臨床・実地向けの教科書の1冊であるが、「発声発語の障害」という項目の中で、構音障害の評価、検査も含め器質性構音障害、運動障害性構音障害の訓練法まで解説されている。構音障害の初級入門書として格好である。

2) 溝尻源太郎・熊倉勇美編著「口腔・中咽頭がんのリハビリテーションー構音障害、摂食・嚥下障害ー」医歯薬出版、2000

口腔・中咽頭がんのリハビリテーションに関わる医師、歯科医師、看護師、STなどの専門職のために書かれた教科書で、構音障害・嚥下障害の評価・訓練について詳細に解説されている。補綴治療に関する解説もあり、専門的に学ぶのに適している。

3) 熊倉勇美編著「運動障害性構音障害」建帛社、2001

ST向けの教科書であるが、脳血管疾患、神経筋疾患などに起因する構音障害の評価、訓練についての解説が詳しい。歯科医が直接に診ることの少ないこれらの疾患を学ぶのに向いている。PLPの基本的な考え方も紹介されている。

4) 菊谷 武監訳「喉頭がん舌がんの人たちの言語と摂食・嚥下ガイドブックー将来に向けてー」医歯薬出版、2008

原著は米国メイヨークリニックの言語聴覚士であるJE. Thomas氏とRL. Keith氏によって著され、標記の疾患の治療を受ける患者自身が読むことを想定した本である。それと同時に、治療に関わるすべてのスタッフが読むことによって、基本的知識とともに患者とのコミュニケーションにおける配慮を高めることが出来るユニークな本となっている。

## 関連学会の案内

●第28回日本口腔インプラント学会近畿・北陸支部学術大会

開催日：1月24日（土）～1月25日（日）

会場：千里ライフサイエンスセンター

大会長：前田芳信

問い合わせ先：大阪大学大学院・歯・顎口腔機能  
再建学講座歯科補綴学第二教室

TEL：06-6879-2954

●第27回日本口腔腫瘍学会総会・学術大会

開催日：1月29日（木）～1月30日（金）

会場：栃木県総合文化センター

大会長：草間幹夫

問い合わせ先：自治医科大学歯科口腔外科学

TEL：0285-58-7390

●第26回日本口腔インプラント学会九州支部学術大会

開催日：2月21日（土）～2月22日（日）

会場：浦添市てだこホール（浦添市）

大会長：宮城正廣（みやぎ歯科医院）

問い合わせ先：しおはま歯科医院（豊見城市）

TEL：098-851-1234

●第32回日本嚥下医学会

開催日：2月6日（金）～2月7日（土）

会場：大阪市立総合医療センター（大阪市）

大会長：本多知行

問い合わせ先：大阪市立北市民病院リハビリテーション科

TEL：06-6461-0337

●第63回日本口腔科学会学術集会

開催日：4月16日（木）～4月17日（金）

会場：アクトシティ浜松コンgresセンター

大会長：橋本賢二

問い合わせ先：浜松医科大学歯科口腔外科学

TEL：053-435-2349

# Newsletter No. 8

## Maxillofacial Prosthetics

●第 33 回日本口蓋裂学会

開催日：5 月 28 日（木）～5 月 29 日（金）

会 場：砂防会館

大会長：保阪善昭

問い合わせ先：昭和大学形成外科学教室

TEL：03-3784-8000

●第 50 回日本歯科放射線学会学術大会

開催日：5 月 28 日（木）～5 月 30 日（土）

会 場：大阪国際会議場

大会長：古川惣平

問い合わせ先：大阪大学・歯 口腔分化発育情報学

TEL：06-6879-2967

●第 19 回日本顎変形症学会

開催日：6 月 4 日（木）～6 月 5 日（金）

会 場：仙台国際センター

大会長：川村 仁

問い合わせ先：東北大学・歯・口腔病態外科学

TEL：022-717-8347

●第 118 回日本補綴歯科学会学術大会

開催日：6 月 5 日（金）～6 月 7 日（日）

会 場：京都国際会議場

大会長：矢谷博文

問い合わせ先：大阪大学・歯 顎口腔咬合学

TEL：06-6879-2946

●第 20 回日本老年歯科医学会学術大会

開催日：6 月 19 日（金）～6 月 20 日（土）

会 場：パシフィコ横浜

大会長：山根源之

問い合わせ先：東京歯科大学市川病院・口腔外科学

TEL：047-322-0151

●日本咀嚼学会第 20 回記念学術大会

開催日：10 月 3 日（土）～10 月 4 日（日）

会 場：福岡県歯科医師会館

大会長：沖本公繪

問い合わせ先：九州大学大学院歯学研究院・咀嚼  
機能制御学分野

TEL：092-642-6371

### コンテンツ

第 26 回学術大会案内 .....	1
第 25 回学術大会報告 .....	2
関連学会報告 .....	4
書籍紹介 .....	6
関連学会の案内 .....	7

・皆様のご意見をお寄せください。

日本顎顔面補綴学会広報委員会

委員長 小野高裕

委 員 大慈弥裕之, 沖本公繪, 熊倉勇美,  
隅田由香, 又賀 泉, 山口能正

幹 事 堀 一浩

TEL:06-6879-2954, FAX:06-6879-2957

E-mail:ono@dent.osaka-u.ac.jp

〒565-0871 吹田市山田丘 1-8

大阪大学大学院歯学研究科 顎口腔機能再建学講座